

# 長崎家収蔵の『方意便蒙』について

——越中高岡神農講の記録——

正橋剛二

旧越中国高岡町（現在の富山県高岡市）の累代の医家長崎家に保存されているおびただしい蔵書について現在調査が進められており、このうち、医学関係の写本についてはすでに寺畑により目録が完成している。演者はこの調査に協力していたが、その間『方意便蒙』と名づけられた写本（墨付三八丁）に接し、これに着目して研究をすすめた。

右の結果、この写本が、古来、すなわち正徳年間（二七一—二七五）以来、いくたびか盛衰を繰り返しながらも、百数十年にわたって継続されて来た高岡町の開業医師たちの集団（あるいは結社）、すなわち「神農講」の記録の一部であり、天保十五（一八四四）年十一月中興したときより翌年（弘化二年）九月までの十一か月間にわたる月例会の活動状況を示すものであることがわかった。

長崎家の四代目長崎玄庭の書き残した長崎家譜によれば、家祖荻原孫兵衛は長崎へ赴き、学ぶこと十五年、元禄・宝永の頃（二六八八—一七一〇）高岡へ移住し、以後代々金創術を家業としていた。近隣の人々は荻原家を本姓で呼ばず、通称として「長崎医者」と呼ぶことが多く、いつしかそれがならわしとなったため、荻原家の方では逆に本姓の方を長崎に改めることになったとされている。

同家の五代目長崎浩齋（愿領・健、一七九九—一八六四）は十九歳で江戸に上り、大槻玄沢（芝蘭堂）に師事して蘭方医学を修めて帰国し、北陸地方蘭方医術の先駆的活動を続け、一方、師の玄沢とは多年にわたって親交を続けていた。

浩齋は高岡神農講においては、同じ高岡の名門医家、津島北溪とともにその中心的役割を演じている。

神農講の概略を示すと、その活動の中心をなすものは、講員各自輪番制で持ち廻る月例会であつて、これは、毎月二人程度の講員が自己の珍しい治験例あるいは難治例等を報告して参会者に供覧する症例研究会の部分と、一部には当時各地で催された物産会(平賀源内など)のように、各自が一品二品と持ち寄つた産物や漢方薬などを展示して、その良否・眞贋などを品評する会の機能も合わせていた。

口演にあつては、月例会に供覧された症例の個々について述べて、当時の高岡地方での医療の水準を具体的にするとともに、使用されていた薬剤の種類についても言及する。

当時の各種医療技術は、ややもすれば秘伝秘術として、公開されることが少く、閉鎖的であるのが一般的であつた。極端な場合には師から弟子への秘伝として、弟子たちには他流派との交流を禁止される制約もあつたが、この点、高岡神農講の医師たちは流派を越えて、甚だおおらかに、オープンなたちで自由に交流し、互いに切磋琢磨しているように思われた。

(呉羽神経サナトリウム)